

# 火葬国風景

海野十三

青空文庫



こうのやそすけ  
甲野八十助

「はアて、——」

と探偵小説家の甲野八十助は、夜店の人混みの中で、不審のかぶりを振った。

実は、この甲野八十助は探偵小説家に籍を置いてはいるものの、一向に榮はえない万年新進作家だった。およそ小説を書くにはタネが要いった。殊ことに探偵小説と来ては、タネなしに書けるものではなかった。ところで彼は或る雑誌社から一つの仕事を頼まれているのであるが、彼の貧弱な頭脳の中には、当時タネらしいものが一つも在庫していなかった。逆さに振つてものみ一匹出てこないという有様だった。苦しまぎれに、彼はいつもの手で、フラーと新宿の夜店街へ彷徨さまよいでた。いつだったか彼はその夜店街で、素晴らしいタネを拾った経験があったので、今夜もしやというはかない望みをつないでいたのだった。

「はアて、あいつは誰だったかナ」

甲野八十助は、寒い夜風に、外套の襟を立てながら、また独ひとりごと言をいった。

彼はいまその人混みの中で、どこかで知り合ったに違いない男と不<sup>ふ</sup>図<sup>と</sup>擦<sup>す</sup>れちがったのだった。その男というのがまた奇妙な人物だった。非常に背が高く、しかも猫背で、骨と皮とに痩せていた。眼の下には黒い隈<sup>くま</sup>が太くついていて、頬には猿を思わせるような小じわが三四本もアリアリと走っていた。そして頭には、宗匠の被<sup>かぶ</sup>るような茶頭巾を載せ、そのくせ下は絹仕立らしい長い中国服のような外套を着ていた。そして右手には杖をつき、歩きたびにヒヨックリヒヨックリと足をひいていた。

「やあ、——」

と甲野八十助は、そのときこの奇妙な男に声をかけたのだった。彼は至って顔まけのしない性質だったから……。

「いよオ——」

と相手は口辺に更に多数の醜いしわの数を増しながら、ガクガクする首を前後に振り、素直に応じたのだった。

八十助はそれで満足だった。それ以上、何を喋ろうという気もなかった。そのまま、この知人と別れて、同じ人混みをズンズンと四<sup>よつ</sup>谷<sup>や</sup>見<sup>み</sup>附<sup>つけ</sup>の方へ流れていったのだった。

(あいつは、誰だったかナ)

八十助には、いま挨拶を交した奇妙な男の素性を思い出すことが、何だか大変楽しく思われて来た。それでソロソロこの楽しい一人ゲームを始めたのだった。

だが、思う相手の素性は、いつまで経つても、彼の脳裏に浮びあがりはしなかった。

「誰だったか。あいつの素性よ、出てこい、——」

八十助は、小学校の友人から出発して、中学時代、大学時代、恋愛時代、それから結婚時代、さらに進んで妻と死別した後の遊蕩時代、それから今の探偵小説家時代までの、ことごとくの時代の中に、彼の奇妙な男の姿を探し求めたけれど、どうもうまく思い出せなかった。ついそこまで出ているだが、どうも出て来ないのであった。彼はすこしジリジリとして来た。

そのとき彼は、大きな飾窓ウインドの前を通りかかった。そしてそこに並べてある時事写真の一つに眼を止めた。「逝ける一宮大將いちのみやたいしょう」とあつて、太い四角な黒枠に入っている厳めしい正装の將軍の写真だった。その黒枠を見たとき、彼は電光の如く、さつきの奇妙な男の正体を掴んだのだった。

「うん、彼奴だツ。——」

そう叫んだ彼は、不思議にも、叫び終ると共に、なぜかサツと顔色を変えた。何故何故

?

ねずみやせんしろう  
鼠谷仙四郎

「そうだ、彼奴だ。彼奴に違いない！」

かまきりおとし

螳螂 男 への古い記憶が電光のようにサツと脳裏に映じた。黒梓写真を見たときに、

どうして彼奴のことを思い出したのであろうか。それはいわゆる第六感というものである。うが、不思議なこととて気になった。しかし後日になってその不思議が解ける日がやってきたとき、八十助は呼吸の止まるような驚愕を経験しなければならなかったのである。

「そうだ、彼奴は姿こそ変り果てているが、鼠谷仙四郎に違いない！」

鼠谷仙四郎——という名前を口のなかで繰返していると、八十助は小学校へ上ったばかりのあの物珍らしさに満ちた時代を思い出す。木の香新しい、表面がツルツル光っている机の前に始めて座った時、その隣りに並んでいるオズオズした少年が鼠谷仙四郎君だった。

そのころの鼠谷は、顔色は青かったが、涼しいクリクリする大きい眼を持ち、色は淡いが可愛い小さい唇を持った美少年だった。たまたま机を並び合ったというので、二人の少年はすぐ仲善なかよしになつてしまった。この仲善しは、年と共に濃厚になり、聽やがて大学を卒業すると二人はこれまでのように毎日会えなくなるだろうというので、女学生もやらないだろうと思われるほどの大騒ぎを起したのだった。

その揚句あげく、八十助と鼠谷とは一つのうまい方法を考えた。そのころ二人とも勤め先が決つていて、八十助は丸の内の保険会社に、鼠谷の方は築地つきじの或る化粧品会社へ通勤することになつていた。それで申し合わせをして午後の五時ごろ、二人が勤め先を退けるが早いか、距離から云つてほぼ等しい銀座裏のジニアという喫茶店で落ち合い、そこで紅茶を啜すすりながら積もる話を交わすことにしたのだった。これは大変名案だった。二人はすっかり朗ほがらかになり、卒業のときに大騒ぎをしたのが可笑おかしく思われてならなかった。

ところがこの名案ジニアのランデヴー(?)は名案には違いなかつたが、彼等二人の交際に思いがけない破局もたらを齎もたらすことになつたのも運命の悪いたずら戯ずらであろうか。それはこの喫茶店に、露子という梅雨空つゆぞらの庭の一隅に咲く紫陽花あじさいのように楚々そそたる少女が二人の間に入つてきたからであつた。

「鼠谷さんは、そりや親切で、温和おとなしいからあたし好きだわ」

と朋輩という露子だったが、また或るときは

「甲野の八十助さんは、明るいお坊ちゃんネ。あたしと違って何の苦勞もしてないのよ、いいわねエ」

とも云った。

昨日の親友は今日の仇敵てきとなり、二人は互に露子の愛をかちえようと急あせしたが、結局恋の凱歌は八十助の方に揚がった。八十助と露子とが恋の美酒に酔って薔薇色の新家庭を営む頃、失意のドン底に昼といわず夜といわず喘ぎつづけていた鼠谷仙四郎は何処へともなく姿を晦くらましてしまった。そのことは八十助と露子との耳にも入らずにいなかった。流石さすがに気になったので、探偵社に頼んで出来るだけの探索を試みたりしたが、鼠谷の消息は皆か目知れなかった。これは屹度きつと、人に知れない場所で失恋の自殺をしているのかも知れないと、二人は別々に同じことを思ったのだった。

ところがそれから三年経って、八十助は妙な噂を耳にした。それは鼠谷仙四郎が生きているというニュースだった。しかも彼は、同じ東京の屋根の下に、同じ空気を吸って生きていたのである。彼の勤め先というのは、花山火葬場の罐かまがかり係であった。



当分は、彼は勤めに出ても、鼠谷のことが気になって仕事が出来なかつたが鼠谷は、別に彼等夫妻に危害を加えようとする気配もないばかりか、次の年にはチャンと人並な年賀状を寄越したりした。そんなことから八十助夫妻は、始めに持った驚愕と警戒の心をいつともなく解いていった。一年二年三年と経ち、それから五年過ぎた今日では、八十助にとって鼠谷仙四郎はもう路傍ろぼうの人に過ぎなかつた。それには外にもう一つの理由があつた。というのは、八十助の恋女房の露子が、この春かりそめの患いからポツンと死んでしまつたため、彼は亡妻なきつまを争つた敵手のことなんかいよいよ忘れてしまつたのである。

その鼠谷仙四郎が、こうして久し振りで目の前に現われたりしなければ、八十助は一生涯彼のことを思い出すことなどはなかつたであらうのに……。

「ハテナ……」

と、そのとき何に駭おどろいたのか、八十助は舗道の上に棒立ちとなつた。彼はつい今まで忘れていた重大なことを思い出したのだつた。

「ハテ……、鼠谷仙四郎なら、あいつは確か死んでしまつた筈だつたが……」

## 暗鬼は躍る

「鼠谷仙四郎なら、生きている筈がない！」

八十助が顔の色を変えたのも無理はなかった。なぜなれば、いまから二三ヶ月ほど前、彼はハガキに印刷した鼠谷仙四郎の死亡通知を受取ったことを思い出したからだ。なぜそのような重大なことを度忘れしていたのだろうか？

その文面には、たしかに次のような文句があったと思つた。

「……鼠谷仙四郎儀、療養<sup>かな</sup>叶わず、遂に永眠<sup>つかまつり</sup>仕<sup>そうろう</sup>候<sup>あいだ</sup>間、此段謹告候<sup>このだんきんこくそうろうな</sup>也<sup>り</sup>。

追<sup>おつて</sup>而<sup>だ</sup>来<sup>び</sup>る××日×時、花山祭場に於て仏式を以て告別式を相営み、のち同火葬場に於て茶毘<sup>そろう</sup>に附し申可<sup>そうろう</sup>候……」

この文面から推<sup>お</sup>せば、彼はたしかに病気で死亡し、その屍体はたしかに火葬せられたのだつた。しかも皮肉なことに、彼が生前世話を焼いていた花山火葬場の罐の中で焼かれ、灰になつてしまつた筈だつた。尤<sup>も</sup>も稀<sup>と</sup>には死人<sup>とむらい</sup>がお葬<sup>よみがえ</sup>の最中に甦<sup>よみがえ</sup>つて大騒ぎをすることも

ないではないが、それは極めて珍らしいことで、もしそんなことがあれば、鵜の目鷹の目で珍ダネを探している新聞記者が逸する筈はなかった。しかし最近の新聞記事にはそんな朗かな報道がなかったことから推して、かれ鼠谷の死体は順調に焼場の煙突から煙になって飛散したに違いあるまい。すると……？

すると八十助は、今しがた其処の夜店街の人込みの中で、旧友鼠谷仙四郎の、幽霊を見たことになる。

「ううツ——」

彼はガタガタ慄えだした。そして外套の襟を咽喉のまえで無暗に掻きあわせた。もうこうなつては小説のタネのことなどを考えている余裕はなかった。なんだか脳貧血に襲われ、そうな不安な気持ちになった。そこで彼は、通りかかった一軒の酒場の扉をグンと押して、中へ飛びこんだ。

「ブランデーを……。早くブランデーを……」

給仕の小娘を怒鳴りつけるようにして、洋酒の壇を催促した。彼の前にリキュール杯が並ぶまでの僅かな時間さえ、数時間経つたように永く感ぜられた。ブランデーの栓を抜こうとする小娘の手を払いのけて、彼は自らグラスに注いだ。ドロドロと盛りあがってくる

液体をグツグツと、立てつづけに四五杯もあおった。腸の中がカツと熱くなってきて、やがて全身に火のような熱い流れが拡がっていった。

「ふーッ」

と彼は溜息をついた。

（ああ、助かった！）

と彼は心の中で叫んだ。そしてまたしてもグラスを手に取上げた。気が次第に落ち着いて来て、始めてあたりの閑かんじやく寂な空気がついた。

八十助の座席の隣では、二人の男が物静かな会話をつづけていたそれを聞くとともに、彼は聴いた。

「……というわけでネ」と紋付羽織の男が言った。「どうも変なのだ一宮大将ともあろうものがサ、まさか株に手を出しやしまいし、死の直前に不動産を全部金に換え、しかもそいつを全部使途不明にしてしまい、遺族は生活費の外に一文も余裕がないというのだからネ」

「それに変だといえ、大将の急死がおかしい。いくらなんでも、あんなに早く逝くものかネ」

「僕は大將の邸で、変な男を見かけたことがある。肺病やみのカマキリみたいなヒョロ長く、そして足をひいている男さ。あいつが何か一役やっているに違いない」

「でもあいつは其後死んじゃったという話じゃないか……」

二人の話をここまで聴いていた八十助は、そこから先をもう聞くに堪えなかった。話題に上っているカマキリのような男というのは、あの鼠谷仙四郎のことに相違ない。この二人も彼奴が死んじまったといっているではないか。

八十助は何がしかの銀貨を卓子テーブルの上に置くと、酒場から飛び出したのだった。

### 幽霊男

酒場を出てみると、そこは賑にぎやかな夜店街の切れ目だった。そこから先は夜店がなくなつて、急に日が暮れた様な寂しい通りだった。彼は当てもなく、足を早めた。

そのときだった。丁度そのとき、彼の背後から声を懸けたものがあつた。

「モシモシ、甲野君……」

突然わが名を呼ばれて八十助はギョツとその場に立ち竦すくんだ。背後を見てはならない——誰かが警告しているように感じた。とって呼ばれて振り向かず居られようか。

「モシモシ、甲野君じゃないか……」

「あ——」

彼は思い切つて、満身の力を込めて、背後を振りかえつた。

「呀あッ」

そこには背のヒョロ高い、眼の下に黒い隈の濃いカマキリのような男——あの鼠谷仙四郎の幽霊が突つ立っていた。

「やア甲野君」

とその怪物はニヤニヤ笑いながら声をかけた。

「キ、キミは誰ですウ——」

「誰だとは、弱つたネ」と怪物は一向弱つていなそんな顔で云つた。「僕は君と中学校で机を並べていた鼠谷……」

「鼠谷君なら、もう死んだ筈だッ」

「そいつを知つていりや、これからの話がしよいというものき。はッはッはッ」と彼は妙なことを云つた。「なぜ死んだ人間が、生き返つて君達に逢うことができるのか——そいつは暫らく預かつておくとして、もしそんなことが出来るとしたら、君はそれがどんなに素晴らしい思いつきだと考えないか」

「くだらんことを云うな。幽霊なら、ちと幽霊らしくしたらどうだ」

と八十助は云つたものの、自分の方が随分下らんことを云つたものだと思はれた。

「まあいい。僕が幽霊だか、それとも生きているか、それは君の認識に待つこととして、僕は一つ君に聞いてみたいことがある」

幽霊にしては非常にしつかりしたことを云うので、八十助はもう何がなんだか判らなくなつた。そして応える言葉も見当らなかつた。

「いいかね。君は細君を亡くしたネ。たしか君たちは熱烈な恋をして一緒になつたのだネ。君は輝かしい恋の勝利者だつた。……」

「ナ、なにを今頃云つてるんだい」

「うん、……そこでダ、君に訊いてみたいのは、君は亡くなつた細君——露子さんと云つたネ、あの露子さんに逢いたかないかね」

「露子に？」

露子に逢いたくないかといつても、露子は亡くなったのだ。そして火葬に附して、僅かばかりの白骨を持つてかえつて、今それを多摩墓地に埋めてある。骨になった者に逢いたくないかというのは、盆の中の水を地面にザツとあけてその水を再び盆の上に取り戻してみせる以上に難いことだった。このカマキリ奴は、幽霊である上に御丁寧にもおかしいのだと思つた。

「いいかね。死んだ筈の僕が斯うして君の前に立っているのだ。見たまえ、ここはすこし淋しいが、たしかに四谷の通りだよ。僕は生きていることを認めて貰えるなら首を横にちよつと廻して、君の恋女房の露子さんが生きているかもしれないことを考えないかね」

（首を横にちよつと廻して……）と云われた八十助は、ハツと驚いて、幽霊男の両側をジロジロと眺めまわした。

「やつぱり気になると見えるネ。ふふふふッ」

と鼠谷と名乗る男は、煙草の脂で真黒に染まつた齒を剥きだして笑つた。

八十助は赤くなつた。しかし彼の眼には、死んだ女房の幽霊らしいものは見えなかつた。



「イツヒツヒツ。……いくら探しても、まさか此処には居やしないよ」

鼠谷はますます機嫌がよかった。それだけ八十助は腹が立ってたまらなかつた。

「君はこの僕を黽なぶるつもりだナ。卑劣なことはよし給え」

「ナニ俺が君のことを黽なぶるつて？」鼠谷はわざと大袈裟おおげさに駭おどろいてみせた。「それア飛んで

もない言いがかりだよ。俺の言うことは大真面目なんだ。それを信じない君こそ実に失敬じゃないか……とは云うものの、君が一寸ちよつと信じないのも無理がないと思うよ。余りに俺の云うことが突飛とつびだものネ」

鼠谷は怒るかと見せ、その後で直すぐ顔色を和やわらげて八十助の機嫌をとるのだった。八十助はようやく気持を直した、それが策略であるかも知れないとは思いつながら……。

「とにかく君は大嘘おおうそつ吐きだネ」と八十助は相手の顔にぶつけるように云った。「チャンと生きている癖に死亡通知をだしたのだからネ。僕としても、もし今夜君にめぐり逢わな

かつたとしたら、君は火葬場で焼かれて骨になっていることばかり思っているだろうよ。君は何故、死んだと詐つたんだい」

「詐つちやいないよ、俺は。あの死亡通知は本当なのだ。まア落着いて俺の言うことを一通り訊いてくれよ。全く奇々怪々な話なんだから。……」

鼠谷は八十助の腕をとらえて放そうとしなかった。そして此処では話ができないから、何か飲みながら話そうといった。そして馴染のいい酒場を知っているからといって、しゅん巡じゅんしている八十助を無理に引張つて行つた。

それは確かに新宿裏にある酒場で、名前もギロチンという店だったが、その辺の地理に明るい八十助もそんな店のあるのを知つたのがその夜始めてだった。扉ドアを押して入つてみると、土間は陰気にだだ広く、そして正面には赤や青や黄のレッテルの貼つてある洋酒の壇壇が駭くばかりの多種に亘わたつて、重なり合つた棚の上に並べてあり、その前のスタンドはいやに背が高く、そしてその間に挟まつて店の方を向いているバアテンダーはまるで蟬人形のような陰影をもつていた。

「いらつしやいませ。……貴方あなたのお席はチャンとあれに作つてございます」

バアテンダーはゼンマイの動き出した人形のように白いガウンの腕だけを静かにあげて、

隅の席を指した。そこには白バラの活けてある花瓶が載っていた。観察すればするほど奇妙な酒場だった。八十助はいつか西洋の妖怪図絵の中に、こんな感じのする家が出ていたのを思い出した。

鼠谷はカクテルを注文すると、すぐに話の続きを始めた。

「……いいかね、甲野君。俺は一旦死んで、たしかにあの花山火葬場の炉の中に入れられたんだ。それを見たという証人もいくらでもあるよ。その人達にとっては、俺の生きていることを信ずることよりも、死んだことの方を信ずる方が容易だろうと思う。本当に俺は死んだのだ。一旦死んだ世界へ行つてきて、それから再びこの世に現れたのだ。思いちがいをしてはいけないよ。君には俺がよく見えるだろうけれど、俺はとくの昔に、この世の人ではないのだ」

「莫迦莫迦しい。もうそんなくだらん話は止し給え。誰が君を死人の国から来た男だと思うだろうか。それよりも、君の生きていたことを祝福して、一つ乾杯しようじゃないか」  
八十助は鼠谷がおかしいのだと思つたので、いい加減にその相手から遁れるために、乾杯をすすめた。

「ナニ祝杯をあげて呉れるというのかい。そいつは嬉しい。では——」

カチンと洋盃カップを触れあわせると、二人は別々の盃さかずきからグツと飲み乾した。

「やあ、これで俺の勝利だ。今度は俺が君のために乾杯することにしよう」といってバーテンダーに合図をした。

「君の勝利だつて、何を云っているんだ——」

八十助は相手の言葉を聞き咎めた。

「それはこつちの話さ。いまに判るがネ。つまり君は俺がこの世の者でないという俺の説を信じてくれる見込がついたからさ。……さあ酒が来た。君のために乾杯だ」

「なんだつて？ 君は……」

八十助はそこまで云つたときに、俄にわかに酔いが発したのを覚えた。彼の前にある世界が、酒場が、そして鼠谷が、一緒になつてスーツと遠くへ退いてゆくように思われた。

(呀ッ。これはしつかりしなくては……)

と卓子テーブルの上に手を突張ろうとしたが、どうしたのかこのときに彼の upper body は意志に反してドタンと卓子の上に崩れかかった。

## 火焰下の金魚

八十助は不思議な夢を見ていた。――

クルン、クルン、クルン……

妙な音のしている空間に、彼は宙ぶらりんになっていた。赤いような、そして青いような、ネオンの点滅を身に浴びているような気がした。

クルン、クルン、クルン……

細かい綾のような波紋が、軽快なピッチで押しよせてきては、彼の身体の上を通りすぎてゆくのであった。すると今度は、上からも下からも、左からも右からも、前からも後からも（後方<sup>うしろ</sup>さえよく見えたのだから、後で考えると不思議である）、美しい虹が、槍が降ってくるように真<sup>まっすぐ</sup>直に下りてきては、身体の傍をスレスレに通りすぎるのだった。それもやがて、水の泡沫のように消え去ると、今度は大小さまざまなシャボン玉が、あつちからもこつちからも群をなしてフワリフワリと騰<sup>のぼ</sup>ってくるのだった。

クルン、クルン、クルン……

シャボン玉の大群はゆらゆらと昇って、どこまでも騰ってゆくように見えたが、そのうちに何か号令でもかけられたかのように、その先頭のシャボン玉がピタリと止ってしまった。それは丁度、見えない天井につきあたったような具合だった。なおも後からフワリフワリと騰ってくるシャボン玉は、みるみる重なりあつて、お互いに腹と腹とをプルンプルンと弾きあつた。八十助は何だか自分の胸を締めつけられるような苦しさを感じたのであつた。

するとこんどはそのシャボン玉が、風に煽あおられるように、少しずつ騒さわめき立つと見る間に、やがてクルクルと廻りだした。その廻転は次第次第に速力を加え、お仕舞いにはまるで鳴門なるとの渦巻のようになり、そうなるとシャボン玉の形も失せて、ただ灰白色の鈍い光を見るだけとなつた。だんだん暗くなつてゆく視野は、八十助の心臓をだんだん不安おとに陥おとし入れてゆくのであつた。……

そのとき、忽然として、泥土でいどの渦の中に、なにかピカリと光るものが見えた。なんだろうと、一生懸命みつめてみると、その泥土の渦の中から浮び上つて来たのは一つの丸い硝子ラス器がだった。その形は、夜店で売っている硝子の金魚鉢に似ていたが、内部は空虚からだった。（金魚鉢なんだろうか？）

と不審に思っていると、その鉢の底からパツと火焰が燃えだした。金魚鉢の上の穴からも真赤な焰ほのおの舌は盛んにメラメラと立ちのぼって、まるで昔の絵に描いた火の玉のようになった。八十助はどうしようもない不安の念に駆られて、アレヨアレヨと見つめているばかりだった。

すると急に、火焰が上に動きだした。金魚鉢の中で、火焰だけが競せり上りだしたのであった。見る見るうちに火焰の底が現れた。火焰はズンズン騰のぼってゆく。やがて金魚鉢の頂上のところ一面に焰々と火は燃え上った。焰の下は何だろうとよく見ると、そこには清澄な水が湛たえられてあった。

水は硝子のせいでもあろうか、淡うすい青色に染まっついて、ときどきチチチと歪ゆがんでみえた。その歪みの間から、何か赤いものがチロチロと覗いて見えた。

(何だろう、あれは!)

チロチロと揺めく赤いものは、だんだんと沢山に殖ふえていった。よくよく見ていると、それは小さい金魚の群であることが判った。

(金魚が泳いでいる!)

可愛い金魚が泳いでいるのだ、しかし何という奇怪なことだろう。金魚のすぐ頭の上は

水面だったが、そこには呪わしい紅蓮ぐれんの焰がメラメラと燃え上っているのだった。哀れなる金魚たちは、その焰に忽ちたちま焼かれて、白い腹を水面に浮き上らせるだろうと思つて気の毒に眺めていたが、その心配はすっかり無駄に終つた。何故なぜなら金魚は焰の下の水中で、嬉々として元気に泳ぎつづけていたからである。

焰が水中の金魚を焼かないとすると、焰は何を焼くだろうかと、急に心配になつた。すると紅蓮の焰はまるで生物のように八十助の存在を認めて、そのメラメラといきり立つ火頭を彼の方に向け直すと、猛然と激しい熱風を正面から吹きつけた。

「うわーッ」

八十助は駭いて後方へ飛びのいた。焰は執拗に追いかけてきた。彼は夢中で駈けだした。ドンドン駈けて駈けてつづけた。

あまり一生懸命に駈けたので、気がついたときには、全く思いがけない場所に仆たおれている自分に気がついた。振りかえつてみたが、もう焰は見えない。どこにも火が見えない。八十助の周囲には涯しない永遠の闇が続いていた。火焰の脅迫は去つたが、それに代り合つて闇黒の恐怖がヒシヒシと迫つてきた。全く何も見えない無間地獄の恐怖が……。

彼は首を動かしてみた。頭の下に固いものが触れた。彼は地獄の底に、仰向きになつて



寝ているのだということが判った。なんだか頭の芯がピシピシ痛む。彼は手を痛む額の方へ伸ばした。そのとき思いがけなくも、伸ばした手が胸より少し高いところで何か固いものにぶつかり、ゴトリと響を立てた。

鼻をつままれても判らぬ暗闇の中に、ゴトリと手の先に当たったものは、一体何だったであらうか。

ゴトン、ゴトン。

(ム。——これは板らしい！)

八十助は、ゴトリと手先に触れたものを、板と感じた。板なればどこにある板であろうか。彼は手首を真直に立てて、上の方をさぐった。だが何にも触れない。こんどは腰をすこし浮かしてみた。そして手首をまた動かしてみた。果然なにか手先に触れた。

ゴトン、ゴトン。

(あッ、——上も板だ)

横も板、上も板、下も板らしい。足先で裾の方をさぐってみると、これも板、それなれば頭の上の方も板に違いない。するとこれは一体どこなどころへ来ているのだろうか。四方八方板で囲まれたところといえば……。

「おお、そうだツ。——」

八十助の心臓は、早鐘のように鳴りだした。

「これは棺桶の中だ。棺桶の中に違いない！」

彼の胸には、急に千貫もあろうという大石を載せられたように感じた。棺桶の中に入れてある。いつの間に入れられたのか。彼は人事不省から醒めて、生きてある悦びを、やっと感じたばかりだったが、その悦びは束の間に消え去った。いくら生きていても、棺桶の中に入れられていては、どうしようもない。彼は望みがないと知りつつも、手足や首をゼンマイ仕掛けの亀の子のようにバタバタ動かした。ドカンドカんと板の上を叩いた。叩いているうちに不図気がついた。

（こうして叩いていけば、誰かが発見してくれるかも知れない）

八十助は、彼の入った棺桶がどこかの祭壇に置かれている場面を想像した。しかし何のザワメキも鐘の声も聞えないところから見れば、それはまず当てがなかった。

（それでは、死体収容所かも知れない？）

死体収容所なれば、森閑しんかんとしているのも無理がない筈だった。そうだ、そうだ。死体収容所であろうと思った。それで彼は、しばらく暴れることを中止して、両方の耳を澄ま

した。外部から何の音も響いてこないことを確かめるためだった。

「いや。……何か聞こえる！」

彼はハツと胸を衝かれたように感じた。何か聞えるのであった。あまり大きい声ではなかったが、水道の栓をひねったときにするようなシュウシュウという音が聞えて来た。

「何だろう、あのシュウシュウいう音は？」

そのうちに、ドンドンというような音が交つて来た。その間にカーンと、金属の触れ合うかん高い音が交つて聞えた。

「おや。——」

それは、どこかで聞いたことのある音響だった。ドンドンという低いながらも、底力のある物音が地鳴りのように、八十助の腹の底を打った。彼は呼吸をこらし、身体をすくめてその異様な物音に聞き入った。

パチパチというような音が交り始めたと思う間もなく、今度は八十助の身体が、不思議に熱くなって来た。考えてみると、先刻から気がつかなければならなかったことだが、彼が暗黒の箱の中で気がついてからこつち、室内は春のように暖かだった。厳冬の真唯中だというに、まるで春のような暖かさは不思議だった。ところがいま急に熱くなって来たの

でこの異様な温度の上昇に気がついたというわけだった。

「何が始まったのだろうか？」

と思ううちに、パツと眼の先が明るくなった。といつてもあけがた暁に薄つすりと陽の光りがさしこんでくる位の明るさだった。奇態なことに、別に臭気というものを感じなかつたけれど、——それは後に至つて、一種の瓦斯ガスマスクが懸けられていたので、臭気を感じなかつたことが判つた——このパツと差し込んだ明るさと、パチパチと物の焼け裂けるような音響とは、八十助に絶望を宣告したも同様だった。彼の脳裏には、始めてこの不思議な場所についての一切が判明した。

「ううッ。これは火葬炉の中だッ。もう火がついて、棺が焼けはじめたのだッ。ああ、俺はどうなる！」

彼は、上下の齒をギリギリと噛み合わせた。

思いあたる怪夢

所もあろうに八十助は、自分自身を、焼場の火葬炉の中に発見したのだった。

(生きながらに焼き殺される！)

ああ、何という恐ろしいことだ。生きていると気がついて悦んだのも束の間、次の瞬間、身に迫って来たものは、生きながらの焦熱地獄だった。死んで焼かれるのなら兎とに角かく、生きながら焼き殺されるなんて、そんなむごいことがあるか。八十助は焰が手足をいづらせ焰が毛髪にメラメラ燃え移る場面を想像した。——彼は当てのない呪いの言葉を口走つた。

「ククククツ——」

どこからか忍び笑いが聞えて来た。その声には充分——聞き覚えがあつた。彼奴あいつだ！

鼠谷仙四郎奴が笑っているのだ。それを合図のように、火は一きわ激しくドンドンと燃えさかつた。

「うぬ、悪魔奴あくまめ！ 悪魔奴あくまめ！」

彼は動けぬ身体を、自暴やけに動かした。そのために、身体を堅く縛っている麻縄が、われとわが肉体に、ひどく喰い込んだ。もうこうなつては、麻縄のために、手首がちぎれて落

ちようと、太股がひき切られようと、そんなことは問題外だった。身体の一部でもよいから、自由になりたい。そして火のつこうとしてこの棺桶の板をうち破りたい……。

「うーッ……うぬッ」

八十助は血と汗とにまみれながら、獣のように咆哮し、そして藻搔もがいた。

そのときだった。実にそのときだった。

なんだか一つの異変が、横合から流れこんで来た。それは有り得べからざる奇蹟の様に思われた。一陣の涼風が、どこからともなくスーツと流れこんで来たのだった。

「……？」

八十助は藻搔もがくのを、ちよつと止めた。

(どうしたのだろうか?)

何事が起つたらしい。

焼けつきそうだった皮膚の表が急に涼しくなった。

そして、焦げつきそうな痛みがすこしずつ取れてゆくように思った。

(かん罐の火が消えたかな!)

と思つたが、しかし罐の火はいよいよ明るく燃えさかっているらしいことが、棺ふたの蓋の

隙間から望見された。罐は盛んに燃えている。それなのに、棺の中にいるわが身は急に楽になったのだ。

ポツーン。

そのとき何か冷いものが、胸のあたりに落ちてきた。

「おや。――」

と彼は叫んだ。その声のすむかすまないうちに、つづいてポツリポツリと冷いものが上から降つて来た。

「ああ、水だ。――水が洩れてくる」

彼の元気は瞬間のうちに回復した。気が落着いて来た。助かるらしい。八十助は両眼をグルグル廻して何物か見当るものはないかと探した。有った、有った。棺の隙間から見える真赤な火の幕、その火の幕すこし手前の、おそらく棺桶のすぐ外と思われるところに、空間を斜に硝子管が走っているのを認めた。そしてその硝子管の中には、小さい水泡を交ぜた透明な液体が、たいへんな勢いで流れているのだった。それは水に違いなかった。さつきポツンと胸の上に落ちて来た水と同じところから、供給されている水に違いなかった。（ああ、なんとたる不思議！ 火葬炉の中に、冷水装置がある！）

人体を焼こうとするところに、逆に冷やす仕掛けがあるというのは、何と奇妙なことではないか。このとき彼はゆくりなく、あの変な夢のことを思い出した。

「硝子の金魚鉢の水の中に、金魚が泳いでいて、——それで水の表面には火焰の幕があった。——ああ、あれだッ」

火焰の天井を持った水中の金魚のように、いま彼の身体も、冷水装置でもってうまく火気から保護されているのだった。

「これア一体、俺をどうしようというのだッ」

八十助は、あまりにも不審な謎をどう解いてよいかに苦しんだ。

そのとき、ギギーツという物音が聞えはじめたと思うと、彼の横たわっている棺桶は、しずかに揺れながら、どうしたのか、下の方へ下りだした。

棺桶は飛ぶ



火葬炉の中で、不思議に焼けもせず、八十助の入っている棺桶は、しずしずと下へおり出した。

(これは?)

と面喰っているうちに、棺桶は下へおりきつたものと見え、ゴトンという音とともに動かなくなった。そのうちにゴロゴロという音が聞え、棺桶は横に滑り出した。トロツコのようなものに載せられて、引張りだされているという感じであった。これらはすべて、暗黒の中で取行われたが、そのうちにまた、ほのあか灰明るい光りが差した。それはどうやら太陽の光りではなく、電灯の光りのようであった。もし八十助が、ガス瓦斯マスクをかけられていなかったならば、このときプーンと高い土の香りを嗅いだことであろう。たとえば掘たての深い地下とんねる隧道をぬけてゆくときのように。

そこへ、ヒソヒソと、人間の話し声が聞えてきた。何を云い合っているのか、一向に意味がわからない。そうこうしているうちに、棺桶は人間の肩にかつ担がれたようであったが、ゴトンと台の上らしいところへ載せられた。そして間もなく、シユウ、シユウという音響が聞えて来て、青い光芒が棺の隙間から見えた。

「クツクツクツ」

「はッはッはッ」

人を馬鹿にしたような高い笑声が、棺の外から響いて来た。八十助はハッと身を縮めた。次の瞬間、ベツトリと冷汗をかけた。どうやら棺の外からX光線をかけたものらしい。X光線をかけると、棺の中は見透しだった。彼が生きて藻掻いているところも、骸骨踊のように、棺外の連中の眼にうつったことであろう。それで可笑しおかそうに笑ったのに違いないい。

「おうーい、甲野君。聞えるかネ」

と鼠谷のしや枯れ声がした。

八十助は石亀のように黙っていた。しかし彼の伸縮している心臓だけは、どうも停めることが出来なかった。八十助は結局、嘲笑を甘んじて受けつづけねばならなかった。

「……むろん聞えているだろうネ。もう暫らくの辛抱だ。しっかりして居給え」

なにを云っているんだい——彼はムカムカとした。

(どうなと勝手にしろ！)

彼は一切の反抗と努力とを抛棄した。もうこうなつては、藻掻けば藻掻くほど損だと知った。そう諦めると、俄にわかに疲労が感じられた。ゴトゴトと棺桶はまた揺ぎ、そしてまた別

な乗物にうつされた。こんどはブルブルブリブリと激しい音響をたてるものだった。彼はそれを子守唄の代りにして、グウグウ眠った。グーツと浮き上るかと思えば、ドーンと奈落へ墜ちる。その激しい上下も、いまとなつては、彼を睡らせる揺籃ようらんとして役立つばかりだった。

十時間——ではあるまい、恐らく数十時間後であろう。八十助の棺桶は、遂ついに搬ばれるところまで搬ばれたようである。俄に周囲が騒々しくなった。汽笛が鳴る。音楽が聞える。花火が上る。一体之は何ごとが始まったのであろうか。

嵐のような歓呼とでも云いたい喧騒の中をくぐりぬけて、最後に彼の棺桶は、たいへん静かな一室に入れられた。

そのとき、またボソボソ云う話声が、棺桶のそばに近づいた。

「じやいよいよ出すかね」

「うん、出し給え」

「では一宮先生、とりかかつてよろしゅうございますか」

「うむ。始めイ……」

ゴソリゴソリと綱らしいものを解く音、それからカンカンと釘をぬくらしい音が続いて

起つた。いよいよ棺桶から出る時が来たのだ。さていかなる場所へ着いたのかしら。それにしても一宮先生とは、どこかで聞いた名前だと、八十助はしきりに棺の中で首を振った。

## 火葬国

八十助は、棺桶——果してそれは棺桶だった——の蓋を開かれたときの、あの奇妙なる気分と、そして驚愕とを一生涯忘れることはあるまいと思つた。だが、それにも増して、奇怪を極めたのは、棺の外の風景だった。

そこには数人の男女が立っていた。その中で、顔の見知り越しな男が二人あつた。一人は云わずと知れた鼠谷仙四郎だった。彼をここまで連れこんだ彼のカマキリのような怪人だった。そしてもう一人は？

(どこかで見た顔だ)

と八十助は咄嗟とつさに考え出そうと努めたけれど、そこまで出ているのに思い出せない。そ

れは非常に肥えたあから顔の巨漢で、鼻の下には十センチもあろうという白い美髯びぜんをたくわえていた。

室内は、どういふものか、天井も壁紙も、それから室内の調度まで、鼠ねずみがかつたグリーン色に塗りつぶされてあつた。そして一方の壁の真中には、大きな硝子窓ガラスが開いていた。その窓は大分高いところについているものらしく、そこに見える外の風景には、広々とした海原が見渡された。そして陸地は焦げた狐色をしていた。海に臨のぞんでいるところは、断崖絶壁らしくストンと切り立っていた。その陸地の一部に大きな建物の一部が見えた。それがわれわれの普段見慣れたものと全く違い、直線で囲まれた真四角いものではなく、すべて曲線で囲まれていたのであつた。又その形が何とも云えない奇妙なもので、一目見てゾツと寒気を催したほどだつた。それに、建物の色が、やはり狐色で、塔のような形の先端は血のように紅く彩られていた。それがまた不思議な力で、八十助の心臓に怪しき鼓動を与えたものである。

(これア一体、どこへ来たのだらう?)

どうも日本とは思われない。と云つて、それほど遠くへ来たようにも思われない。

「どうじゃ、気がついたかの?」

と白い美髯の肥満漢が声をかけた。

「はッ——」

と八十助は、彼の顔を見た。そのソーセイジのようないい色艶の顔を眺めていたとき、八十助は始めて、さつきから解きかねていた謎を解きあてて、愕きの叫び声をあげた。

「あッ——」

「甲野君、一つ御紹介をしよう」

と鼠谷仙四郎がすかさずチヨロチヨロと前に進み出でた。

「こちらはいちのみやたいししょう一宮大將でいらつしやる」

「やっぱり一宮大將！」

一宮大將といえ、あの新宿の夜店街で、飾窓の中に黒粹づきでもって、その永眠を惜しまれていた將軍のことではないか。そういえば、大將の美髯は有名だった。その美髯がたしかに眼の前に見る老紳士の顔の上にあつた。

「一宮大將は亡くなられた筈ですが……」

「はッはッはッ」と將軍は天井を向いて腹をゆすぶった。「亡くなって此処へ来たのじゃ。この鼠谷君もそうであるし、君も亦いま、ここへ来られたのじゃ」

「私は死にませんよ。死んだ覚えはありません」

「死なない覚えはあつても、死んだ覚えはあるまい。——それはとにかく、君は死んだればこそ、ほらあれを見い、棺桶の中に入っていたではないか」

將軍の指す方を見ると、八十助のいままで収容されていた棺桶が、いかにも狼藉ろうぜきに室の隅はうに抛り出されていた。

「ああ、それでは——それでは、やっぱりここは冥途めいどだったんですか」

「それでもないのじや」

「え?」

八十助の怪訝けげんな顔を暫く見詰めていた將軍は静かに口を開いた。

「ここは、つまり、火葬国じや」

## 奇怪な話

「火葬国？」

八十助は怪げんな顔で、一宮大将と名乗る男の云った言葉を叫び返した。

「そうじゃ。火葬国といったが早判りがするじゃろう」と一宮大将は傍<sup>かたわ</sup>らを向いて「どうじゃな鼠谷君。一つ君から、この国柄を説明してやって呉れぬか。なにしろ君が一番よく知っているでろう」

「はア、じゃ一つ、甲野君を驚かせることにしますかナ」といって八十助の方をジロリと眺めた。「だがその前に、是非<sup>せひ</sup>云つて置かなければならぬことがある」

（おいでなすつたな——）と八十助は思った。

「それは、君を此処へ連れて来たからには、もう絶対に日本へ帰って生活することを止めてもらいたいのだ。第一君はもうお葬式をすませ、戸籍面からハッキリ除かれているのだからネ。いま日本へ帰つても、君が僕を幽霊と間違えたように、君は幽霊だと思われて人々を驚かせる外になんの術も施すことができないのだからネ」

「お葬式を済ませたというと……」

「そうだ。君は覚えているだろう。新宿の酒場で飲んでいたときフラフラと倒れたことを。あれは僕が密かに盛った魔薬の働きなのだ。あれで君は仮死の状態になった。恐らく医師



が診ても、あれを本当の死としか考えられなかつたろう。君は行き倒れ人として一いったん旦アパートへ引取られそれから親類総出でお葬式を営まれたのだ。君の両親も友人もその葬式に参列し、あの花山火葬場で焼いて骨にしたと信じている」

「そんな馬鹿なことが……」

「君の遺族は、壺に一杯の骨を貰つて、何の疑うところもなく、家に引取つたのだ」

「その骨というのは……」

「無論、どこの馬の骨だか判らぬ人間の骨なんだよ。君は知るまいが、人間の骨なんて、いまの世の中には、手を廻せばいくらでも手に入るものだよ」

「ナ、なんていう奴だ。恐ろしいインチキ罐係め」

「そうだ、インチキ罐係の言葉は当たっている。君は僕の少年時代のことを思い出して呉れるだろう、僕はいくら運が悪くなつても、ぼんやり暮らしているほど、自分の力量に自信のない男ではない。云いかえると、罐係をやつたのも、一つの大きな目的があつたことだ。僕は何を考えて罐係になつたか、想像がつくかい」

「……………」それは今となつて想像がつかないでもないが、相手は何しろ非常識な男のことであるから、ハッキリは指さして云えない。黙っているのが勝ちである。

「僕は一見不可能なことを可能にして、この世の中に素晴らしいゆつくりした国を建設したかったのだ。君はあの<sup>おおみそか</sup>大晦日に迫ると、なんとなく身边がゆつくりして、嬉しさが感ぜられるということを経験したことはなかったかネ。あれは、もう今年も残りは二三日となり、いくら焦つてみても、もうどうにもならぬ、——という気持ちだが、あの使い残りの二三日をたいへんゆつくり嬉しく感じさせてくれるのだ。これをもっと徹底させると、どういうことになるか。それは人間が戸籍面からハッキリ姿を消すことになる！」

「ふふん」と八十助は呻<sup>うな</sup>つた。

「つまり自分の死亡届けを出して置いて、自分は鬼籍<sup>きせき</sup>に入る。そうなれば、この世でのいろいろの厭なきずなを断つことが出来る。もう借金とりも来なければ、大勢の子供の面倒を見なくてもよいし、年寄りになれば、老いぼれと蔑<sup>さげす</sup>まれなくてもいい。鬼籍に入った上で、本当の生命の残りを、極めて自由に有意義に使うなら、こんな愉快なことは、無かるうじやないか。——それがそもそもこの火葬国の起源であるというわけだ」

鼠谷仙四郎の醜怪な頬には、ぽつと紅の色がさし昇つて来た。

白煙に還る

鼠谷仙四郎の饒舌じょうぜつはつづく。

「僕は花山火葬場に長く勤めているうちに、火葬炉に特別の仕掛けを作ること考え出した。早く云えばインチキ火葬だ。誰でも棺桶を抛り込んで封印をしてしまえば、それで安心をする。しかし封印をしたのは表口だけのことだ。封印をしてないところが上下左右と奥との五つの壁だ。一見それは耐火煉瓦たいかれんがなどで築きあげ、行き止まりらしく見える。誰一人として、あの五つの壁を仔細しじらに調べようと思つた者はない。僕はそこを覗ねらい、一旦封印をして表口を閉じた上で、側方の壁から特設の冷水装置をつきだして棺桶の焼けるのを防ぐ仕掛けを作つた。その次にあの罐の真下に当る地下室から棺桶を下げおろす仕掛けを作つた。そして予め用意あらかじして置いた人骨と灰とを代りに、あの煉瓦床の上に散らばらしておく。それでいいのだ。遺族の者は、すこしも怪しむことを知らない」

「ああ、悪魔！ 君はそうして、私の妻の死体を引っ張り出して、自由にしたのだな」

「まあ待ち給え。——僕はこの仕掛けに成功すると、こんどは人間を仮死おとしに陥れる研究に

始めて成功した。こいつはまた素晴らしい。奇妙な毒物なんだが溶かすと無味無臭で、誰も毒物が入っていると気がつかない。これを飲んで、識らないでいると、昏睡状態となり、そして遂に仮死の状態に陥することができる。しかも医師たちはそれを真死と診断する外はない程巧妙な仮死だ。この二つの発明が、僕に火葬国の理想郷を建設する力を与えて呉れた。それからこつちというものは、これかと思う人物を、巧たくみに仮死に導いては、飛行機に乗せてこの火葬国へ送りつけ、そして君がこの部屋で経験したような順序で蘇生させていたのだ。傑けっしゅつ出した男であれ花朧かしい美女であれ、僕のように思った人間は、必ず連れて来て見せる。ここに居られる一宮大将においてを願ったのも、この火葬国建設の指揮を願うのに最も適任者だと思つたからだ。大将はすっかり共鳴されて、私財の全部をわが火葬国のために投ぜられたのだ」

「するとここは一体何処どこなのだ。日本ではないのだネ」

「そうだ。小笠原群島より、もつと南の方にある無人島なのだ」

「僕の露子はどうした。早く逢わせて呉れ給え」

「露子さんか」

と鼠谷ちよつとは一寸困つたような顔付をした。

「露子さんに逢わせてもいいが、その前に、君から誓いを聞かねばならぬ」

「誓いとは？」

「この火葬国の住民となつて、文芸省を担任して貰いたいのだ」

「文芸省？」

「そうだ。君の文芸的素養をもつて、この火葬国に文芸を興おこして貰いたい」

「文芸を興せというのかい」

文芸ということ聞いた八十助は愕然として吾われに帰った。そうだ、八十助の原稿は常に売れなくても彼の生命は文芸にあつたのである。しかしその文芸は、あくまであの喧騒を極めた巷ちまたの間から拾い上げてこそ情熱的な味があるのであつた。理想郷とは云え、こんな無人島から拾い上げられる文芸なんてどう考えても砂を噛むように味気のないものと思えない。況いんや探偵小説なんてものがこんな理想郷に落ちては居まい。彼は矢張り陋ろうこ巷うに彷徨さまよう三流作家であることを懐なつかしく思い、また誇りにも感じた。そう思いつくと、俄にわかに矢のような帰心に襲われたのだつた。

「僕は断る。僕はやっぱり東京へ帰るよ」

「なに東京へ帰る。……あの露子さんに逢いたくないのかい」

「うん、急に逢いたくなくなった。僕はそんなに突拍子とつぴようしも無い幸福に酔おうとは思わな  
いよ。あのゴミゴミした東京で、妻を失ったやもめの小説家としてゴロゴロしているのが  
性に合っているのだ。僕は帰る！」

「どうしても帰るといふか」と鼠谷は残念そうに訊きいた。

「うん帰る！」

「よオし是非もない」

鼠谷は歯ぎしりを噛んで二三歩ツツと下った。

ド——ン。

銃声一発。真白なモヤモヤした煙が八十助の鼻先に拡がった。それつきり、八十助の知  
覚は消えてしまったのだ。……随って今のところ、火葬国についての話も、これから先が  
無いのである。

# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第3巻 深夜の市長」三一書房

1988（昭和63）年6月30日第1版第1刷発行

初出：「帝都日日新聞」

1935（昭和10）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 火葬国風景

海野十三

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>